

## 資料5. 検討会での対話の様子

## ① ジルが書いた作文 (Stiggins, 1997)

## 私の犬

誰でも人生において何か大切なものを持っています。私にとって一番大事なものは、今までには、私の犬でした。彼の名前はラフでした。おじいちゃんの家の近くの野原でキャンプをしていたとき、古い納屋の中にいるのを、お兄ちゃんが見つめました。誰かがそこにラフを置き去りにして、ラフはとても弱っていて、死にそうでした。でも、私たちは、看病してラフを元気にし、ママは、少なくともしばらくの間、ラフを飼っていていいと言ってくれました。結局それが10年になりました。

ラフは黒と茶色で、長いしっぽとだらりと下がった耳と、短くて太った顔をしていました。特別な種類の犬ではありませんでした。多くの人は、ラフのことをかっこいい犬とは思わなかったでしょうけど、私たちにとってラフは特別でした。

ラフは、しょっちゅうこっけいないたずらをしては、私たちを楽しませました。影に隠れてにわとりを驚かそうとしたけどにわとりにはただのはったりだとわかったのであきらめなくてはなりません。ラフがトラックにはねられたとき、私はもう泣き止むことはないと思いました。お兄ちゃんもラフがいなくなってさみしがっているし、ママだってそうですが、私以上にさみしがることなんて誰にもできません。

## ② 検討会の事例2 (Stiggins, 1997. 下線部は引用者による)

「ひどいもんでしょ？」とジルは先生に尋ねる。

「君はどう思うんだい？」と、彼は同じ質問を彼女に投げ返す。彼女はすぐには答えませんが、エド [先生] は沈黙を破らない。数秒たつ。エドは待つ。

「終わりが気に入らないわ」と、ついにジルは自分から言う。

「どうしてだか言ってごらん」。

「だって、ただ終わってしまうんだもの。全体的に言って、私が本当に感じたようには書かれていないわ」。

「どういうふうに君は感じているんだい？」

彼女は一分ほど考える。「そうね、私はいつでもラフのことを思い出して寂しがっているわけではないわ。全然思い出さない日だってある。だけど——ひょっとした拍子に、ドアのところにはラフがいるような気がしたり、納屋の横に影が走るのを見たりするの。時々、外で料理をするときなんか、ラフのことを考える。だって、ラフったら、グリルからホットドッグを取って、一度なんかババに怒鳴られて、滑って足をひどく火傷したの」。

「ほら、ジルとラフの本当の話が出てきはじめてるよ！ 君は僕にラフのことを本当の自分の言葉で話してくれているし、僕は君の感じていることを察することができる。ラフのことを書いたとき、そういうふうには話していたかい？ 君の書いたものを、もう一度読んでみよう」。

そうしたあと、ジルはこういった。「かなりつまらないわね、あんまり私らしくない！」

「もし君が話していたように書いたとしたら、どういうふうになると思うかい？」

「物語のようになるでしょうね、多分」。

「やってごらん、そしてどうなるか見てみよう。ラフについて自分の言葉で僕に語ってごらん。それに、グリルからホットドッグを取った話は、面白い絵になるね？ そういった心の中の絵について話すと、とってもよくなるよ。君が言っていることを僕が絵のように心に描けるとき、それをアイデアというんだ。君は物語にイメージと焦点を与えている、そこが僕の気に入っているところなんだ。この作文にはそういうイメージがあるかな？」

2人は作文をもう一度ざっと読む。ジルは低い声でこう言う。「ここにはイメージは全然ないわね——事実ばかり」。

「じっくり考えてみて、君がラフについて思い出させる個人的なことのいくつかを書いてみてはどうだい？」

「そうすべきだと思う？」

「そうだね、君が話してくれていたとき、ずっと君らしさを感じたよ——どれだけ君が犬をなくして寂しいか、彼のことをどれだけ考えているかといったことをね」。

「そういったことは、何とか書けそうだよ」。

「ちょっとやってみてごらん。そして来週また話し合おう」。

「スベリングや時制や、文章はどう？ 大丈夫かしら？」とジルが尋ねる。

「それについては、後回しにしよう。まずはアイデアと、構成と、自分の言葉で書くことを考えてごらん。他のことはあとで考えればいいから」。

「でも、間違うのは嫌だよ」と彼女は打ち明ける。

「でも、今そんなことを心配するのはいいと思うかい？」

「わかんない。ただ、悪い点はとりたくないの」。

「よし」エドはうなずく。「今のところは、さっき言った三つ、アイデアと、構成と、自分の言葉で書くことだけについて、評価することを約束しよう」。

「それだけ？」

エドはもう一度うなずく。「それで、君がもし学校の雑誌にこの作文を発表したくなったら……」

「他の部分に手直しできるってことね？」

「そう、手直しする時間をあげるよ」。

(西岡加名恵『教科と総合に活かすポートフォリオ評価法』図書文化、2003年、pp.76-77)